

1. ほ場の準備

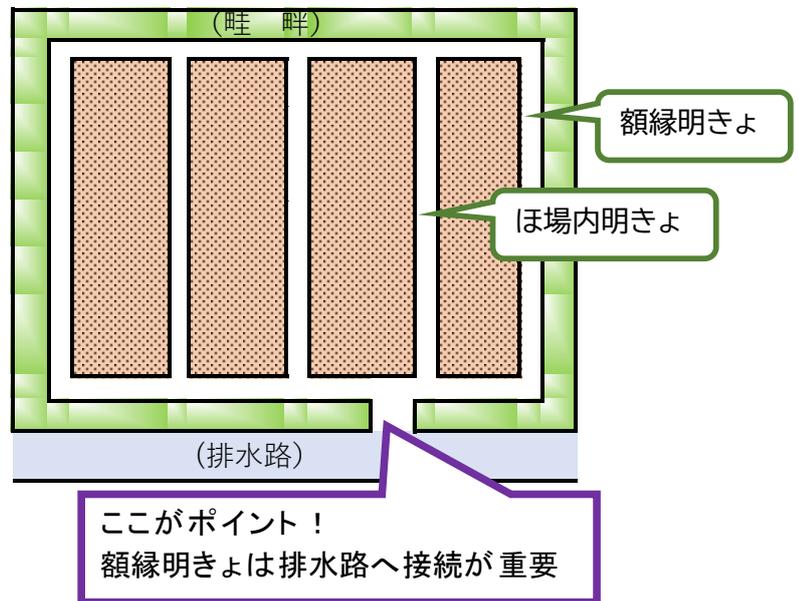
(1) 通排水機能の確保

- ◆ 播種直後は、湿害を受けやすい時期です。播種後にほ場が過湿状態になると酸素不足により、種子が腐敗しやすくなります。
- ・ 暗きよが通っていても、通排水のための明きよは必要です。
- ・ 排水路への接続を確認しましょう。

○明きよの機能

- ・ 表面水の速やかな排水路
- ・ 干ばつ時の給水路

○明きよの間隔：10m～30m



(2) 土壌 pH と碎土率について

- ◆ 土壌 pH の目標： pH6.0～6.5
- ・ 水田からの転換畑で pH が低い場合は、炭カルや苦土石灰を使って調整しましょう。
- ◆ 碎土率：
 - ・ 直径 2cm 以下の小土塊の比率が 70% 以上になるようにする。
 - ・ 地表面には直径 3cm 以上の土塊が混ざらないようにする。
 - ・ 碎土が不十分だと、種子が乾燥しやすく発芽不良となります。
 - ・ 大きな土塊が多いと、土壌処理剤の処理層がきれいに形成されません。

(3) 基肥の目安

- ◆ 基肥は根粒菌が定着するまでの初期生育を補います。
- ・ 土壌中の窒素濃度が高いと根粒菌の着生が悪くなり、初期生育以降の生育に影響します。基肥は大豆の初期生育を確保できる最少量を施用しましょう。

【施肥例 ①】

- 基肥 <大豆化成 550> (N5-P15-K20%) 現物量 40kg/10a 程度
- 追肥 <LP コート 40> (N42%) 現物量 12kg/10a 程度 (追肥時期：最終培土時)

【施肥例 ②】

- 基肥一発 <大豆専用一発 522 号> (N15-P12-K12%) 現物量 40kg/10a 程度 (基肥一発の場合、追肥は省略します)

2. 播種

◆ 各品種の特性に合わせた播種様式で、適期に播種しましょう。

表 1 品種別播種様式

品種名	栽培様式	播種期	播種量	播種様式		栽植本数 (本/㎡)
			(kg/10a)	畦間	株間	
ミヤギシロメ	標播	(注)6月上～ 中旬	4～5	75～80 cm	20～25 cm	10～14

(注) 「みやぎの麦類・大豆栽培基本方針」より引用。ただし、現状に合わせ播種時期を修正。

- ・ ミヤギシロメは蔓化・倒伏しやすいので、地力や前作等のほ場条件を考慮し、播種量を減らす、基肥を減肥し播種時期をやや遅くする等の倒伏軽減対策を行いましょう。

3. 中耕・培土

◆ 大豆の生育向上に向けて、適切な時期に中耕・培土を実施しましょう。

播種時期	回数	タイミング
普通栽培	2回目安	①大豆2～3葉期：子葉節まで
		②大豆6～7葉期：初生葉節まで

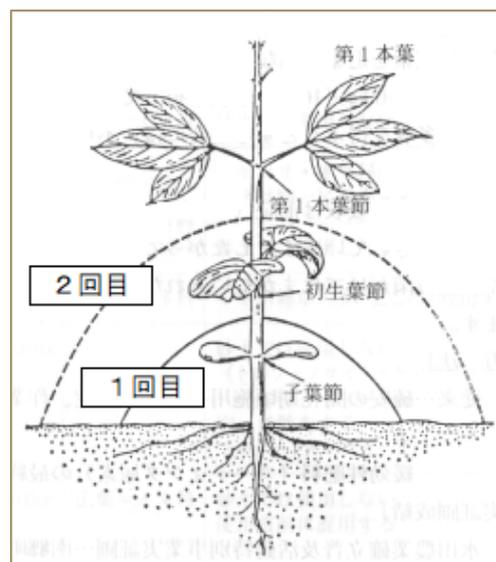
○中耕培土の効果

- ・ 培土部分からの根の発生
→養水分吸収、根粒菌の窒素固定増加
- ・ 倒伏防止
- ・ 除草効果
- ・ 通気性の改善

- ・ 普通栽培の大豆は中耕・培土2回が基本です。

雨天が続き、機械作業ができなくなることがありますので、大豆1～1.5葉期になったら、早め早めの中耕・培土に務めましょう。

- ・ 遅い時期の中耕・培土は、主茎や分枝の損傷・断根により生育に支障をきたすため、2回の中耕・培土は遅くとも開花の10日前までに終わるようにしましょう。

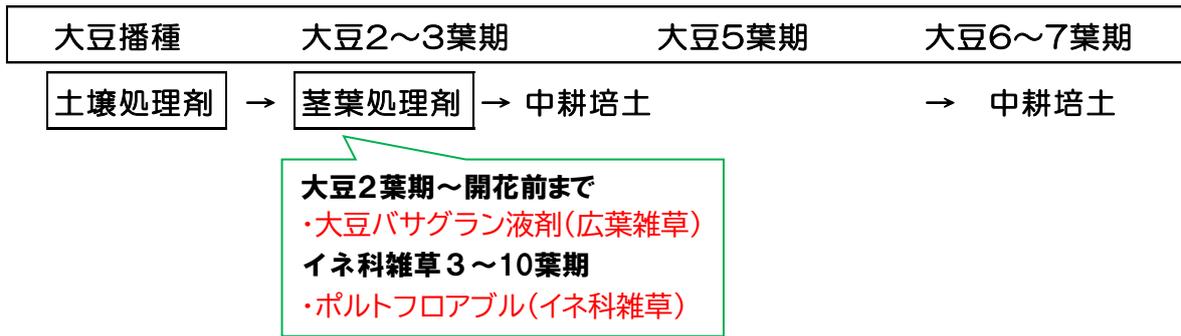


4. 病害虫・雑草防除

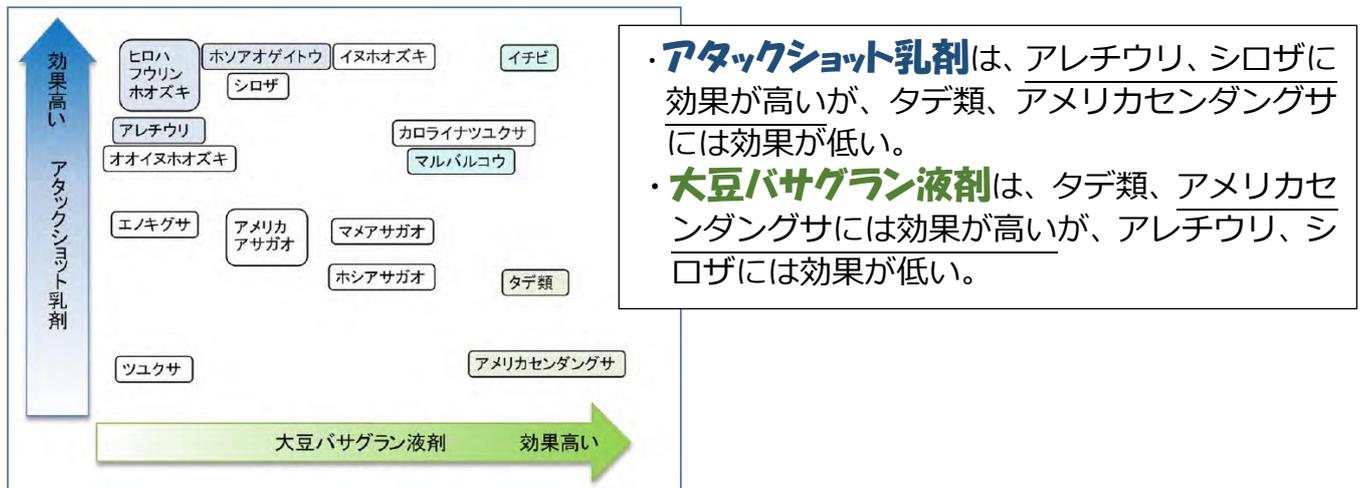
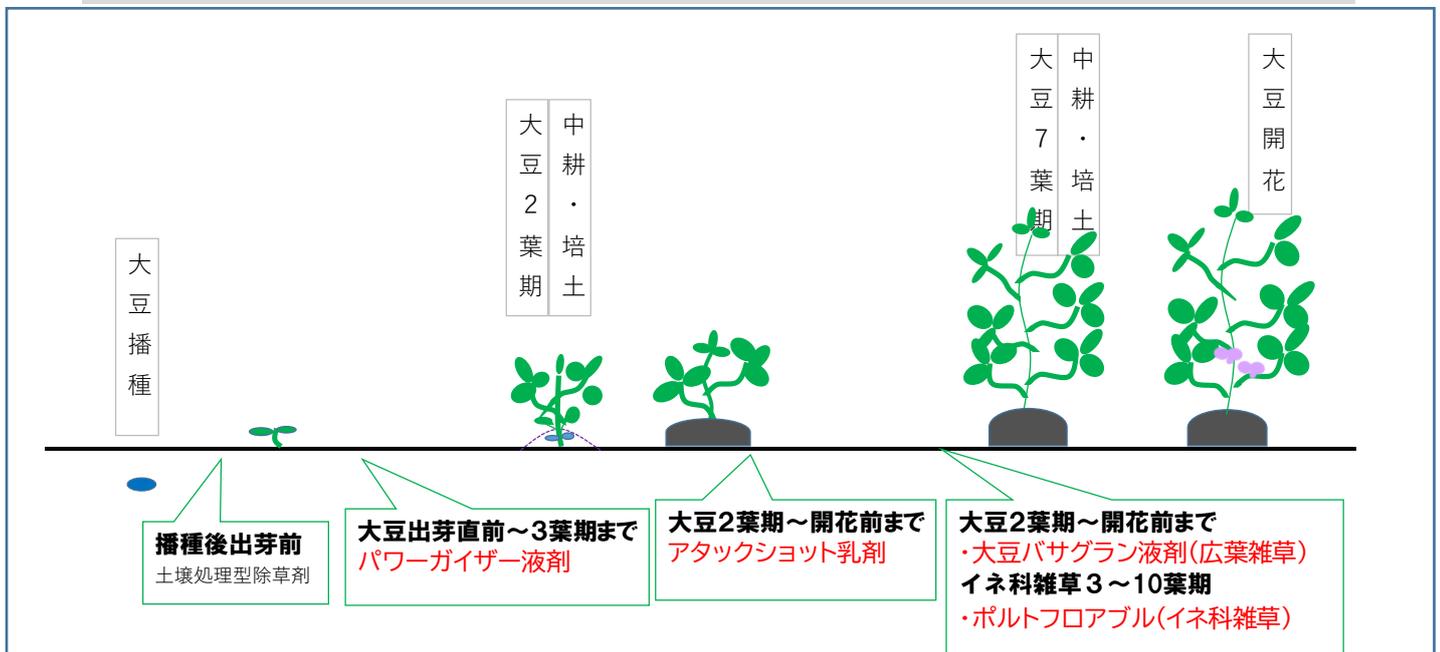
(1) 病害虫防除（播種前～生育期）

- ・ 病害虫（紫斑病、茎疫病、黒根腐病、タネバエ、アブラムシ類、フタスジヒメハムシ等）対策として、種子塗抹剤を使用しましょう。

(2) 雑草防除 基本的な除草体系



難防除雑草「帰化アサガオ類、アレチウリ」は体系処理で対策しましょう。



茎葉処理型除草剤の主な雑草に対する効果の差
 (農研機構(中央農業センター)2021改定版マニュアルより抜粋)

注) 記載した農薬情報は、令和5年5月10日現在のものです。
 使用に当たっては最新の登録情報を確認の上、周辺の他作物への農薬飛散等に十分注意してください。

農薬危害防止運動実施中 (令和5年6月1日~8月31日)